

モスクワ大学における毛沢東講話の謎

Mystery on Mao Zedong's Speech at Moscow

University

九州大学留学生センター准教授 白土`悟

SHIRATSUCHI Satomi

(International Student Center, Kyushu University)

1. はじめに

2013年12月26日午前中、中国共産党中央委員会は「毛沢東同志生誕120周年を記念する座談会」（紀念毛沢東同志誕辰120周年座談会）を北京の人民大会堂において開催した。席上、中共中央総書記・習近平は講話を行った。その全文が翌日『人民日報』に掲載され、全国民に公表された。その長文の一節に次のように述べている。⁽¹⁾

「革命と建設の長期の実践の中で、毛沢東同志を主要な代表とする中国共産党人は、マルクス・レーニン主義の基本原則を根拠として、中国の状況に適合した科学的指導思想を形成した。これが毛沢東思想である。毛沢東思想は独創的理論によってマルクス・レーニン主義を豊富にして発展させた。毛沢東思想は数世代の中国共産党人に教育され、それにより育成された多くの中核的人材が、新民主主義革命、社会主義革命、社会主義建設の時期に重要な作用を発揮し、また新しい歴史時期に中国の特色ある社会主義を創業し建設するために重要な作用を発揮してきた。鄧小平同志は言う。毛沢東思想、この旗幟を失くしたり捨てたりすれば、實際上我々の党の光輝ある歴史を否定することになる。いかなる時も毛沢東思想の旗幟を高く掲げるという原則を揺れ動かしてはならない。我々は永遠に毛沢東思想の旗幟を高く掲げて前進するであろう、と。」

（習近平「在紀念毛沢東同志誕辰120周年座談会上的講話」）

習近平講話には、現在の中国共産党による毛沢東評価が盛り込まれた。毛沢東個人に関して、「晩年、特に文化大革命の中で嚴重な錯誤を犯した」、「革命の領袖は人であって神ではない」等々と批判的意見を述べる一方、総合的には毛沢東の功績はその錯誤を差し引いてもなお余りあるとする。他方、「毛沢東思想」については、その基本的立場・観点・方法は「实事求是、大衆路線、独立自主」であり、

これは党として必ず継承しなければならないと強調する。

「毛沢東思想」は「毛沢東同志を主要な代表とする中国共産党人」が共同で創造した思想であり、毛沢東個人の思想ではない。毛沢東がその創造過程で中心的役割を果たしたことは間違いないが、一応「毛沢東思想」と毛沢東個人の思想は別々に評価されている。

この「毛沢東思想」は党员・軍隊・大衆に宣伝され、社会主義建設に邁進するための思想的基盤を培ってきた。特に、青少年に対しては共産主義者の養成を目的として、中学校から大学まで約10年間、必修課程である「政治課」において教えられており、今後も教えられていくだろう。⁽²⁾

さて、2013年5月現在、日本の大学・日本語学校等に約10万人の中国人留学生がいる。毛沢東逝去後に生まれた彼らは、もはやかつてのように熱狂的ではないが、その生誕120周年には多少の感興を覚えたという。それはきっと毛沢東の革命的生涯と「毛沢東思想」をずっと学び続けてきたからであろう。彼らは毛沢東を案外身近に感じているのかもしれない。生誕120周年の折に私にもある思い出が蘇った。

2. 毛沢東講話は記録されたのか

彼ら中国人留学生たちは、毛沢東と言え、1957年11月にモスクワ大学で留学生たちに対して行った毛沢東講話を反射的に思い浮かべるといふ。冒頭の一節「世界はあなたがたのものです」あるいは「東風は西風を圧倒する」は今では有名であり、知らない者はほとんどいないほどである。だが、不思議なことに冒頭部分を除けば、毛沢東講話の全容を知る者はほとんどいないのである。

もうかなり前のことである。私はモスクワ大学の毛沢東講話の全容を知りたいと思って、様々な書物をひっぱりだして見たことがある。毛沢東の著作としては『毛沢東選集』（全5巻）がまず挙げられる。第1巻から第4巻までは建国前の重要文献を収め、第5巻は建国直前から、モスクワでの共産党・労働者党代表者会議での発言「すべての反動派はハリコの虎である（1957年11月18日）」までを収めている。だが、そこにはモスクワ大学の毛沢東講話はなかった。また、毛沢東の主として教育関連の講演や論考を編集した『毛沢東同志、教育工作を論ず』（1958）も重要な史料集であるが、そこにも収められていなかった。⁽³⁾

捜しあぐねていた私に、ある中国人留学生はこの時の毛沢東講話には筆記録がないのではないかと聞いた。それも一理あるかもしれない。当時の中国の国家留学派遣はその規模が非常に小さく、派遣されるのは一部エリートに限られていた。政権の安定と経済再建に奔走する政府機関にとって、また国民一般にとっても、強い関心を持ち得ない事業だったかもしれない。従って、モスクワ大学の毛沢東講話もさほど重視されなかった可能性は高い。改革開放後、科学技術の遅れを取り戻し、経済力を回復させるのに留学派遣による高度人材養成が不可欠であると再認識され、1980年代から海外留学の規模を拡大し、2000年以降は私費留学を自由化して、留学は大衆化した。思うに、これによって、冒

頭の一節「世界はあなたがたのものです」や「東風は西風を圧倒する」が留学奨励のスローガンのように頻りに使用され、広く知られるようになったのではないだろうか。

それにしても、モスクワ大学において毛沢東は留学生に向かって一体何を語ったのか。私にとっては長い間、謎であった。

3. 毛沢東の短い講話

新中国政府は建国直後、ソ連・東欧諸国への国家派遣留学を開始した。東西冷戦の中で、社会主義陣営の中心的存在であるソ連への派遣をとりわけ重視していた。1952年8月9日、ソ連政府との間に「中華人民共和国公民がソ連の大学（軍事学校を除く）で学習することに関する協定」（關於中華人民共和国公民在蘇連高等学校〈軍事学校除外〉学習之協定）を正式に締結。前年1951年8月に375名を派遣したのを皮切りに、1965年までの15年間に計8,410名を派遣している。

その間、1956年2月7日、国家副主席・朱徳、次いで1957年1月9日、國務院総理・周恩来がモスクワ大学を訪問している。そして、同11月17日、中共中央主席・毛沢東、副主席・鄧小平はじめ楊尚昆、彭徳懐、烏蘭夫、胡喬木など錚々たる面々が各国共産党・労働者党代表者会議に出席するためソ連を訪問した際、一行連れ立ってモスクワ大学を見学。毛沢東は講堂で約3,000人の中国人留学生・実習生を前に講話を行ったのである。

それから40年を経て、即ち毛沢東講話40周年を記念して、朱訓編『希望寄托在你們身上』（1997）が発刊された。当時、毛沢東講話を聞いた人々のソ連留学回顧録である。これによって、私は漸く長年の謎を解くことができた。拙著『現代中国の留学政策』（2011）に、その本の一編を引用して、毛沢東講話の光景を描いた箇所があるので、以下に引用しよう。⁽⁴⁾

《当時、財政学部学生だった紀照亜の回想記「世界はあなたがたのものだ—毛主席の留ソ学生に対する談話を想う」（世界是你們的—憶毛主席对留蘇学生的談話）は次のように記している。

「午後6時、台上の入り口付近に数人の人影が現れた。撮影する記者が現れ、台上のすべての電灯がつけられて明るくなった。誰かが叫んだ。毛主席が来られた！と。会場内のすべての者が立ち上がって懸命に拍手し、講堂内に雷鳴のように響き、耳をつんざくほどであった。私たちは思わず知らず叫んでいた。毛主席、你好！毛主席、万歳！という声が会場全体から沸き起こった。」

毛沢東と中央指導部の面々は入場し、やがて毛沢東が台上の中央に腰掛けた。場内の拍手は鳴り止まなかった。激しい拍手から次第にゆっくりした拍手になり、軽くリズムのある拍手に変わった。

感激して涙を流す者もいた。拍手は約10分間も続いたのち、ソ連大使の劉暁が、拍手を止めて着席するよう求めたが、更に数分、鳴り止まなかった。毛沢東は両手を差し出して、着席するよう身振りで指示した。会場の拍手は漸く止まったという。

「我々が座るや、湖南なまりの声が聞こえた。『世界はあなたがたのものです。』毛主席が最初の一句を話したのである。会場全体から熱烈な拍手が沸き起こり、また長く続いた。私たちの聴いたこの一句は誰も正しく聞き取ることはできなかった。全員が毛主席の話す一字一句に全神経を集中していた。『私たちのものでもあります。』と第二句が話されるや、またまた熱烈な拍手が沸き起こった。毛主席はさらに言った。『しかし、結局はあなたがたのものです。』再び長く熱烈な拍手が起こった。

『あなたがた青年には努力前進の精神が鬱勃としている。まさに旺盛な時期です。朝の8時か9時の太陽のようだ。希望はあなたがたの身上に託されています。世界はあなたがたのものです。未来はあなたがたに属します。』またも熱烈な拍手が起こった。『しかし、あなたがたは現在まだ学習中であり、仕事をしていないし、国家の大事を管理していない。私たち老人が仕事をして、国家を管理しています。よって、世界は私たちのものでもあるのです。』またも沸き起こった熱烈な拍手、そのあとに続けて『しかし、私たちはもう年だ。みんな西天に昇ってマルクスに会うことになります。これが自然の法則です。国家はあなたがたによって管理されなければならない。従って、世界は結局あなたがたのものであり、未来はあなたがたに属しているのです。』と述べた。

我々は話に聴き入り、次を聴こうと待ち構えていた時、毛主席の『わたしの話は終わりです』という言葉聞いたのだった。数秒後、会場全体から熱烈な拍手が沸き起こった。」

この短い講話の後、毛沢東は会場からの質問を受けて30~40分間、歓談している。当時の毛沢東は「偉大な指導者」(偉大領袖)として今日では想像もつかないほど中国人民の深い崇敬を受けていた。毛沢東講話は中国の留学派遣政策の基本精神となったのである。即ち、留学生は努力して勉学に励み、いずれ祖国に貢献すべしというものである。この講話は長く語り継がれることになった»

(白土悟『現代中国の留学政策』)

毛沢東講話はかなり短いものであり、準備に時間をかけたとは思われない。いわば挨拶程度だったと言えよう。ただ、国内の政治・経済・教育・科学技術など、いずれの分野においても指導的人材が不足していた状況の中で、当時のソ連派遣留学生に対する中国指導部の期待の高さを知ることはできる。これ以後も中国指導部のモスクワ大学訪問は続いているからである。1960年12月10日、党副主

席・劉少奇、1964年11月13日に国务院総理・周恩来が留学生たちに接見している。

因みに、1960年4月に中ソ論争が顕在化し、中ソ関係は次第に陰悪化していく。同9月13日から21日まで、中国共産党国家科学委員会の党委員会、教育部党組、外交部党委員会は第2回留学生工作会議を急遽開催し、ソ連への国家派遣の削減と質向上の方針、即ち、主に大卒で2年以上の就労経験を持つ者を大学院生、進修生、実習生として派遣し、高卒者は原則として派遣しないことを決定した。

翌1961年から1965年までの6年間の国家派遣は、大学生8人、大学院生103人、進修生81人、実修生10人、合計202人に減少した。1966年文化大革命開始後は約7年間、国家派遣は停止されたので、1965年が最後のソ連派遣となった。他方、大勢の中国人留学者がソ連に居られなくなり、帰国し始めた。ソ連では中国人留学者が帰国を強要される事態も発生し、一時は彼らの身の安全が脅かされる事件も起こったという。1958年から1962年までの5年間にソ連からの留学帰国者は6,100人に上った。かくして、中ソの留学交流は一旦終了したのである。

4. 『毛沢東思想万歳』の戊本について

モスクワ大学の毛沢東講話の代名詞のように言われている「東風は西風を圧倒する」(東風压倒西風)の語句は、紀照亜の回想記が正しければ、講話の中では語られていない。では、どこで語られたのか。謎は残った。推測では、毛沢東講話には<講演>と<歓談>の二つの部分があって、その語句は<歓談>の中で語られたのではないかと思われた。だが、それを証明する史料はなかった。そもそも諸外国の要人との対談ではない。若い留学生たちとの<歓談>が記録するに値するかどうかも疑わしい。その語句だけが印象深かったのでメモされたのかもしれない。

しかし、結論から言えば、<歓談>は記録されていた。文化大革命期(1966-1976)に刊行された『毛沢東思想万歳』(編者・出版社不詳)という冊子に収められていた。これは内部学習用として、毛沢東の講演速記録、会談録、指示や評語、書簡など未公開文書を編集したものである。国内でどれほど流布したか判然としないが、いつしか国外に流出し、「毛沢東思想」を知る上で貴重な史料として研究者間で重視されていた。

東京大学近代中国史研究会が1974年にこれを翻訳・出版している。「訳者はしがき」によれば、当時、日本では現代評論社が「原書」の写真復刻版をすでに出版していたが、『毛沢東思想万歳』には「われわれの知る限りでも、この原書をふくめて四種ある」と述べ、甲・乙・丙・丁と名付けている。「原書」は丁本を指す。⁽⁵⁾

さて、四種とは次のものである。

1. 甲本は、1967年4月刊行、B5判・全46頁。「瑞金における第二次全国ソビエト大会の講演中の文化教育に関する部分の抜粋(1934年1月)」から「報告会議における講話(1966年10月24日)」まで、計61篇の文章を収める。

2. 乙本は、甲本と同時に刊行、B5判・全38頁。甲本を前篇とし、その後篇をなす。「杭州における講話（1965年12月21日）」から「工作方法60条〈草案〉（1958年2月19日）」まで、計17篇の文章を収める。⁽⁶⁾

3. 丙本は、1967年印刷、B6判で甲・乙本より小型で、全289頁ある。「米国共産党フォスター宛の手紙（1959年1月17日）」から、1961年11月以降の「郭沫若宛に書かれた詩の評語」まで、計50篇の文章を収める。

4. 丁本は、1969年8月刊行、B6判で甲・乙・丙本より分量が多く、全720頁。だが、最後の2篇は数頁が欠落している。「1950年の軍隊の生産建設活動参加についての指示（1949年12月5日）」から、「8期12中全会閉幕式での講話（1968年10月31日）」（欠落）まで、計113篇の文章を収める。

東京大学近代中国史研究会はこの中の丁本を全訳（最後の2篇を除く）し刊行したのであるが、そこにはくモスクワ大学の毛沢東講話〉はやはりなかった。こうして、私は甲・乙・丙本を見ることができないまま、いつしかこの件はほとんど忘れ去っていた。

ところが、毛沢東生誕120周年記念の記事を読んで思い出し、かつて購入した『毛沢東思想万歳』という手元の古本を見ていた時、灯台下暗しというべきか、偶然そこに発見したのである。この本は1967年5月に刊行されたもので、B6判・全218頁である。「馬叙倫への手紙〈一〉（1950年6月19日）」に始まり、最後は1965年8月以降と思われるが、「軍事院校を談ず」（年月日不詳）まで、計76篇の文章を収める。つまり、甲・乙・丙・丁本のいずれとも異なる。これを仮に「戊本」と呼ぶことにしたい。

5. 毛沢東の歓談

さて、『毛沢東思想万歳』戊本に収められていたのは、1957年11月13日「モスクワにおける留学生に対する講話」（在莫斯科対留学生的講話）と題された文献であった。これには、毛沢東の〈講演〉の部分は次のように記述されている。⁽⁷⁾

「同志諸君。世界はあなたがたのものです。また我々のものでもあります。しかし、結局はあなたがたのものです。我々はみなこのように年老いてしまいました。しかし、それぞれがそれぞれの長所を持っています。我々老いた者は経験があり、あなたがた青年には努力前進の精神が鬱勃としています。あなたがたはまさに旺盛な時期です。あなたがたは朝の8時か9時の太陽のようだ。希望はあなたがたの身上に託されています」と。

これは上述の回想記に記された講話と類似しているが、若干短い。だが、この文献の大部分は〈講演〉の後に行われた〈歓談〉の部分で占められている。以下、その部分の全訳である。

「世界の風向きは変わりました。去年の気候は良くなかったが、今年の気候は良い。社会主義陣

営と資本主義陣営の闘争は、「西風が東風を圧倒するか、東風が西風を圧倒するかのいずれかだ。」あなたがたは『紅樓夢』を読んだことがありますか。この語句は『紅樓夢』の中の林黛玉の言ったものです。ふたつの陣営、その中に中間地帯がある。西方世界には4億人いて、その中に多くの我々側の人々がいます。我々はその塀の土台に穴を掘ることができ、そこで「地震」を発生させることができます。我々は10数億人いますが、我々の間にも彼ら側の人々がいます、例えば中国の右派のように。この種の人々は比較的少なく、中国では約2%前後を占めています。両方に敵方の人々がいるのです。ちょうど宋末元初の趙孟頫の妻の詩の中に説かれているものです。即ち、「二つの泥菩薩、一緒に打ち砕き、水で調和して、再び二つの泥菩薩を作った、あなたの体に私がいて、私の体にあなたがいる。」というものです。この比喩は完全に当てはまっているとは言えませんが、少しは正しい。すなわち、帝国主義陣営の中に我々側の人々がおり、我々のここにも彼ら側の人々がいます。しかし、彼らの陣営の中にいる我々側の人々はたいへん多いし、我々の陣営の中にいる彼ら側の人々は少ないのです。

国際連合の統計によれば、全世界に27億人がおり、我々は約10億を占め、帝国主義は約4億です。では、あと何億ですか。（「13億です」）この13億は基本的に3つの洲に分布しています。アジア、アフリカ、ラテン・アメリカです。13億の中の7億余は既に民族独立を勝ち取りました。例えばインド、インドネシア、パキスタン、エジプト、スーダン、チュニジア、モロッコ、黄金海岸などです。また6億がこの洲にいます。例えば日本、イラン、台湾、南朝鮮、南ベトナム、トルコなどです。帝国主義陣営の中の、ドイツ、イタリア、日本は戦争しようとは考えないし、できもしない。イギリスと米国は協力しあうことはない。この中間地帯の13億人は両陣営によって奪い合っています。彼らの大多数は我々に傾いています。イギリスやフランスは旧来の植民地主義を持ち、米国は新しい植民地主義を持っているけれども、我々はどのような植民地主義も持たず、そこに軍事基地も作っていません。

我々の中国は大国ですが、また小国でもあります。政治上、人口上は大国ですが、経済上は小国で、まだベルギーに及びません！あなたがたは全く楽しくないでしょう。しかし、なぜ楽しくないのでしょうか？ 比べられるものは比べてもよいが、比べられないものは、比べなくてもよいのです。⁽⁸⁾

マルクス・エンゲルス以後の百年来で、今度の大会は最も盛大なものです。64カ国の共産党がみな参加しました。この数日、数カ国の社会主義国家が会議を開き、多くの事を相談しました。この大会はたいへん良かった。多くの事を決定し、社会主義陣営はソ連を盟主とすることを決定しました。あなたがたは反対しないでしょうね！この2日間ずっと64カ国の共産党の会議が開かれました。今日は日曜日なので、1日休んで、明日閉会する予定です。

社会主義十月革命は人類の歴史上、大きな転換点でした。人類の歴史上には多くの転換点があり

ます。例えばスターリングラードの戦いが第二次大戦の転換点だったように、二つの人工衛星が天に昇り、64カ国の共産党が一堂に会する、これも大転換点です。これは二つの世界の戦争であり、西風が東風を圧倒しないならば、東風が西風を必ず圧倒しなければならないのです。

真正の徹底的な社会主義革命は一朝一夕に成るものではありません。我国における真正の社会主義革命の勝利は、1956年だと考える人もいますが、私は違うと思う。それは1957年でなければならない。1956年の所有制の改変は比較的容易なものでした。こんなふうだった。ちょうど人民政府がこちらの端で、工農大衆があそこの端だとすれば、資本家は中間でしたので、両方で挟むとすぐに挟めたのです。

ある外国人は我々の思想改造は洗脳（洗脳筋）だと言う。私は言い当てていると思います。まさに洗脳なのです。私のこの頭脳も洗ったものです。革命に参加した後、ゆっくりと洗いました。数十年で洗い終わりました。私が以前受け入れていたものはブルジョア階級の教育です。また封建的の教育もあり、孔子の書も少なからず読みました。我々はあの時代、マルクス、エンゲルスを根本的に知らなかったし、ワシントンやナポレオンだけを知っていました。あなたがたは本当に良かった、あなたがたはたいへん幸福だ。あなたがた、こんなに大きな赤ん坊がマルクス、エンゲルス、レーニンなどを知っているのですから。我々のあの時代、中国革命をどのように行うかについて誰も知らなかったのです。

我々はみな「尻尾を切り落とすこと」（割尾巴）をしなければならず、私もあなたがたに「尻尾を切り落とすこと」を勧めます。中国に「尻尾を巻いて正しい人間になる」（夾起尾巴做人）という古い話があります。この話はたいへん道理に適っています。現在、人々は進化し、手さぐりしても尻尾はありませんが、無形のものがあるのです。右派はまさに尻尾を高く立てて、思いあがっていました。青年は二つのものを持っていなければなりません。ひとつは努力前進の精神が鬱勃としていること（朝氣勃勃）、もうひとつは謙虚で慎重であること（謙虚謹慎）です。

今年、国内では5月から6月にかけて満天が黒雲に覆われたように、不景気でした。我々の方針は頑強に耐えることでした。右派に罵らせると、彼らは、共産党は「馬鹿野郎」（王八蛋）だとか、共産党は「中国革命を指導できない」とか、社会主義建設の「成果は少なく、間違いが多い」と罵りました。我々はそれを『人民日報』に載せ、また我々は党政機関や学校に頑強に口を開いてはならないと指示しました。国内ではたくさんの大字報が貼り出されました。あなたがたはここで貼り出してはいないでしょうね！北京大学は数え切れぬほど貼り出しましたが、『人民日報』は小字報でした。宜しい！「百花齊放・百家争鳴」の上に、さらに「百花齊放・百家争鳴」して、人民の面前で決算報告し、人民に討論させよう。右派はまさに打ち下しましたが、我々の工作の中の欠点はまだ残っています。あなたがたは仕事をしたことがないので、分からないでしょう。あなたがたが、工場長や党委員会書記、校長、副校長、教授、エンジニアとして試しに仕事をすれば、必ず錯誤を犯す

でしょう。8年来、錯誤がありました。今度の整風はたいへん大きな事で、我々は真摯に改革しなければならぬ。この世界には「真摯」（認真）の二文字があれば恐れるものはない。共産党は最も「真摯」を重んじます。幹部が地方に赴任し、大衆と一丸となれば、農民はみなあの八路軍がまた来たと言う。基層幹部の中で1%だけに重大な欠点があり、大衆と離れていますが、大部分は立派です。その中の一部は錯誤を犯しているのです、改正すべきです。

我国の人口は現在6億4000万であり、既に6億ではない。6億4000万人が着手し、一人一人が奮い立ち、風俗を改め、世界を改造しなければならない。これを成し遂げなければならないが、問題は複雑です。あなたがたは農業発展綱要40条を見たことがありますか。現在、新しい40条が出来ました。旧40条は基本的には正確なものでしたが、一部に「主観主義」の要素がありました。⁽⁹⁾新しい綱要では、化学肥料を1500万トンまで増やしました。第2次5カ年計画では全ての合作社が生産と消費の上で裕福な中農（富裕中農）を超えなければならない。私はかつて多くの省の党委員会書記や地区の党委員会書記を招集して会談し、彼らにやれるかどうか尋ねたら、彼らは完全に可能だと言い、また超えることができるという人もあった。また四害を退治する問題のように、これは簡単な事ではない。⁽¹⁰⁾ある人がスズメを捕ってはならないと建議したので、網の一面を開けておくようにして、都市では捕らなくなりました。ここに四川人はいますか、四川のネズミはたいへん多い。北京のハエは捕り終わりましたが、2年経ったら、また出てきた。この問題も決意を持って、皆が着手し、一人一人が奮い立ち、風俗を改めなければならない。このような事においても東風が西風を圧倒するのでなければ、西風が東風を圧倒するのです。

我々の現在の生産力はまだ低い、鉄鋼は520万トンにすぎず、第1次5カ年計画を経過した後、1200万トンになるでしょう。再度5カ年計画を経過すれば、鉄鋼生産量は2200万トンから2400万トンになるでしょう。第4次5カ年計画が完成した時には4000万余トンになります。私がXXX同志に尋ねたら、彼は15年後と言う。イギリスは約3000万トン生産できる、それなら3回の5カ年計画を経過すれば、我々はイギリスを超えます。ソ連が米国を超えれば、その時、世界の様相は大きく変わるはずです。

この任務を完成しなければなりません。まだ15年か、少し多いくらいが必要ですが、この責任はあなたがたの身上に下ろされます。私も1次の5カ年計画を行いますが、更に5年生き、また更に15年生きれば、私は非常に満足ですが、目標以上を完成できれば当然もっと良い。しかし、天には不測の風雲があり、人には朝夕に禍福がある、これも自然弁証法です。⁽¹¹⁾もし孔子が現在もまだ死んでおらず、二千余年前の人々が現在もまだ死んでいないとしたら、それはどんな世界となるでしょうか、そんなことはありえません！だから、私は最初にあなたがたに言いました。世界はあなたがたのものであります。今、私はもう一度その句を言おう。世界はあなたがたのものであることを祝福します。

私はただ3つの話をしました。第一に、ソ連の友人と団結しなければならないこと。第二に、青年は勇敢である上に、また謙虚でなければならないこと。第三に、あなたがたが健康で、しっかり学び、将来立派に仕事をするを祈っていることです。》

(毛沢東「在莫斯科対留学生的講話」)

長い一連の文章になっているが、読めば分かるように、話は途切れ途切れであり、一貫していない。毛沢東が留学生たちとの対話の中で、質問に応じてその都度発した言葉が記録され、それを繋げたもののようと思われる。

6. 結び

モスクワ大学における毛沢東講話の全体像が漸く見えてきた。すなわち、〈講演〉の部分では、留学生に対して、将来の国家運営の責任を背負う自覚を促し、社会主義思想と専門分野を努力して学習するよう督励している。他方、〈歓談〉の部分では、次のことを述べている。

①社会主義陣営と資本主義陣営は闘争中であり、「東風が西風を圧倒する」よう努力しなければならない状況にある。そうでなければ、西風が東風を圧倒してしまう。

②国内では反右派闘争において、知識分子の思想改造を行っている最中である。思想改造は、「洗脳」という言葉で批判されようと、やらなければならない。若い留学生たちはマルクス、エンゲルス、レーニンなどの著作をよく学習し、自ら「洗脳」することが大切である。

③中国は大人口国でありながら、経済的には小国である。しかし、他の国家と比較して、悲観的になってはならない。中国は独自のペースで発展していくのである。

④毛沢東自身を含め、老いた指導部はいずれ死すべき運命である。次の中国指導者として、また世界の社会主義の指導者として、仕事ができるよう成長してほしい、と。

要するに、毛沢東は留学生が今なすべき思想改造と、将来なすべき資本主義国家との政治闘争および祖国の経済建設や文化建設（四害の駆除など）について、国内外の情勢を伝えて奮起を促したと言えよう。それは「毛沢東思想」の基本的な方法である「独立自主」の精神を述べたものであった。それが、冒頭の一節「世界はあなたがたのものです」に込められた真意であったように思われる。

[注]

1. 2013年12月27日付け『人民日報（海外版）』参照

2. 1981年6月27日、中国共産党第11届中央委員会第6回総会において『建国以来の党の若干の歴史問題に関する決議』が通過した。ここで毛沢東の功績と過誤が全面的に評価された。この評価を継

承したものである。

3. 『毛沢東選集』(第1~4巻、1951~60年)、『毛沢東選集』(第5巻、外文出版社、1977年、日本語でも刊行、1982年発売停止) および『毛沢東同志論教育工作』(人民教育出版社、1958年)。それぞれに翻訳がある。『毛沢東選集』(第1~4巻、新日本出版社、1964・65年) および新島淳良・光岡玄共訳『毛沢東、教育の仕事』(新興出版社、1959年)である。

4. 朱訓編『希望寄托在你們身上』(中国青年出版社、1997年、54-59頁) および白土`悟『現代中国の留学政策-国家発展戦略モデルの分析』(九州大学出版会、2011年、131-133頁)

5. 東京大学近代中国史研究会訳『毛沢東思想万歳』上下巻、三一書房、1974年

6. 甲・乙本の中の文革中のものは、新島淳良編『毛沢東最高指示-プロレタリア文化大革命期の発言』(三一書房、1970年)に訳出されている。

7. 『毛沢東思想万歳』戊本、1967年5月、53-57頁

8. この箇所は「他と比較するから嬉しくなくなるのであって、他を気にせず、中国は中国のペースで発展すれば良い」という意味である。

9. 『簡明社会科学詞典』(上海辞書出版社、1984年、267頁)によれば、主観主義とは、「主観から出発する唯心主義の思想方法。主な特徴は、ただ主観的想像を重んじ、客観的实际状況を顧みることなく、書物や経験に頼って客観的法則を無視する。主観主義者や思想の硬直化は、因循守旧して、やみくもに行い、焦ってやみくもに進む。ただ主観的意志に頼って、大衆の意見を聞かず、あるいは門を閉ざしてそれぞれ勝手に車を作るように(閉門造車)、自分勝手にいいかげんなことをして調査研究をしない。その共通点は主観と客観が分裂し、認識と実践が乖離していることである。1942年、延安整風運動の中で、毛沢東は主観主義には二つの表現形式があり、一つは教条主義、一つは経験主義である、この二つは反科学・反マルクス・レーニン主義のものであると述べた。」

10. 四害とは、ハエ、蚊、ネズミ、スズメの害を指す。

11. 原文は「自然弁然法」となっているが、誤植であろう。